# 鎌田とし子自伝を読んで

荒井　寿恵

本書（『「女性史」を生きた社会学研究者の生涯―血さわぎ心躍る日々―』鎌田とし子著　文藝春秋企画出版部　２０２４年２月）は、社会学研究者、鎌田とし子氏（東京女子大名誉教授）の 自伝である。鎌田ゼミで卒業論文を書いた教え子たちに贈る目的で書かれ、私家版として出版された。

第１部は、私が生きた「女性史」である。

タイトルにもなっている、「女性史」を生きた、とはどういうことか。母、娘、孫へと、女性の解放への希望が続いていく物語は沢山ある。しかし、著者は、この何代もかかるような「女性史」を一身で体現するのである。１９２９生まれの著者は、開明的な家庭に育ったが、戦時下の高等女学校時代は学徒動員で勤労奉仕、修学年限も短縮されたうえ、敗戦のどさくさで卒業させられてしまった世代である。

中学1年間しか学べなかった学力で社会に放り出された著者が、自立するために大学に入り直し、悪条件の中で赦される道を探しながら1歩1歩登っていき、遂に研究者の職を得るという物語は、爽やかさを感じさせる。しかし昭和一桁生れの戦争体験は学年ごとに全く異なることは仄聞していたが、戦後男性の多くが学業に復帰したのに対し、女性は「結婚こそが女の幸せ」とばかりに体よく片付けられたのである。この就学期間の欠落は自立を志す女性にとって強力なバリアとなっていく。このバリアを乗り越えて進む格闘史は容易なことではなかったはずだが、疾走感のある文章で綴られていく。学びの末に、著者は日本社会の特質である経済の二重構造が階層間格差の元凶であると見て社会調査に没頭する。その過程で、労働研究の砦となる「日本労働社会学会」の設立にも寄与し、初代代表幹事を務めた。

この背後には、著者を東京女子大学に招いた社会学者、古屋野正伍氏の意図があった。「調査をして得られた事実を理論化していく能力をぜひ女子学生につけてやって欲しい」という期待である。「女性の社会学研究者」というロールモデルの採用と、カリキュラムによって研究者への道を拓いて下さったにもかかわらず、稿者（鎌田ゼミ卒生）はそうした学びをしてこなかったと後悔の念で一杯である。この点、著者は社会科学の研究職は女性に向いていると呼びかけるのである。また、研究者だけでなく、本書はすべての女性に対して「貴女はどう生きるか」と鋭く問いかける書になっている。

第２部は心に残る調査と折々の思い出である。

「わたし流調査論」の章で、著者は、実証主義社会学で名高い北海道大学文学部・鈴木栄太郎ゼミで指導を受けたが、「理論仮説」と「調査の仕掛け」を編み出す過程の醍醐味、面接調査から「新しい事実」を発見する喜びを熱く述べている。これは、現在を生き、何らかの

課題を抱える人にとっては参考になるのではないか。

年代順ではないがここに記された調査の数々も、研究の原点を具体的に語ってくれる得難い書である。

巻末に付された社会調査年表、業績書（著書、学術論文、社会調査報告書）一覧を見ると、戦後の日本社会の農村と都市、炭鉱や重化学工業、労働者の生活と家族など、その風景や変遷が浮かんでくる。

最後の章「〝焚書〟から〝腐蝕書〟へ――セピア色のロンドン市街地図は語る」では、戦時下、思想統制の恐怖から、父の大切な本が燃やされたり、土に埋められたことは「文化的殺戮」であると憤る。のちに父の蔵書のひとつ、貧困研究の古典であるチャールズ・ブースの『ロンドン市民の生活と労働』が読みたくなって自身の手に取り戻した。貧困研究　に向かうことになった運命を感じると共に、研究者ブースの志の原点ともいえるこの地図は、当時すでに大都市であったロンドンで悉皆調査を実施し、住民の暮らしぶりの程度別に色分けした地図を作製するという実証主義の原点ともなったと著者は評価する。

本書は、読む人それぞれに「志」を問うことになるかもしれない。

**【著書】**

鎌田とし子・鎌田哲宏著『社会諸階層と現代家族――重化学工業都における労働者階級の状態Ⅰ』御茶の水書房　１９８３年

鎌田哲宏・鎌田とし子著『日鋼室蘭争議三〇年後の証言――重化学工業都市における労働者階級の状態Ⅱ』御茶の水書房　１９９３年

鎌田とし子著『男女共生社会のワークシェアリング――労働と生活の社会学』サイエンス社　１９９５年

鎌田とし子著『「貧困」の社会学――労働者階級の状態』御茶の水書房　２０１１年

著書・共著・編著他８冊。

（共著者鎌田哲宏氏は、著者の夫であり、仕事の相棒である）

**【学術論文】**

「賃金労働者家族の生活周期」『社会学評論』第１８巻２号　日本社会学会　１９６７年　他４８件

**【社会調査】**

「室蘭市労働者の階層別生活構造調査」（富士鉄・下請企業）１９６４年　他７９件

**【社会調査報告書】**

「農村家庭における保育の実態――社会層による差異を中心にして」『保育研究』第２号　北海道保育専門学院紀要　１９６３年

他１６冊

**★補記**（編集部）

本書は私家版の非売品ですが、入手を希望される方は編集部の村野宛てお問い合せ下さい。メールアドレスは以下。

muranonauka2006706@yahoo.co.jp

サロベツ原野から望む利尻山
北端の原野では木さえ大きく育たない。
行き捨てられたこの地には。
満州からの引揚者が開拓農家となり点在していた。
北大の学生と共に社会調査実習に訪れ。
凍てつく大地で生きる開拓民から
聞くに堪えない苛酷な実態を聞かされた。
貧しいが透明な心を持つ学生の一団は。
激しい怒りを共有しながらただ無言で歩いた。
その中の一人が後に私の人生の相棒となった。
対岸にそびえる利尻山は透徹した空気に包まれて。
あくまでも気高く聳え立っていたのを思い出す。
「女性史」を生きた
社会学研究者の生涯
血さわぎ心躍る日々
鎌田とし子
Toshiko Kamada
文芸春秋企画出版部
「女性史」を生きた社会学研究者の生涯
血さわぎ心躍る日々
鎌田とし子
文芸春秋
企画出版部
文芸春秋企画出版部